

【対談】

大澤真幸

「3・11」以後の日本社会の希望をめぐって

おおさわ・まさち 社会学者。一九五八年生まれ。
京都大学教授などを歴任。『ナショナリズムの由来』で毎日出版文化賞、
『ふしぎなキリスト教』（橋爪大三郎との共著）で新書大賞2012を受賞。
他に『おどろきの中国』『世界史の哲学』など著書多数。

3・11について語ることの難しさ

大澤 3・11の衝撃が、それにふさわしい言葉になりきれていない。そういう感じを、ぼくは持っているんです。一方では饒舌に語られながら、最も優秀でスマートな人が、これについて哲学的・思想的にいうべきことはない、と発言を控えてしまう傾向がある。

つまり、やはりぼくらはものすごいショックを受けている。けれどもそのショックを言葉にしようとするステレオタイプになってしまう。この落差はどうして生ずるのか。ぼくらが本当に衝撃を受けたことは何なのか。こうしたことを、きっちり問わなければいけない。

ぼくには、元妻との間に大学生になる娘がいるのですが、その娘が、3・11の津波と原発事故にとりわけ大きなショックを受けている。彼女は、これから自分は何かものを読むときに、それが3・11以降にふさわしいものか、3・11の事件を踏まえて考えられているかということが一つのメ

ルクマールになるだろう、3・11がなかったかのように書いているものは、これからは信用できない、と言っています。

平野 3・11以前、以降というのは確かにあると思います。〇〇年代はやっぱりアメリカ同時多発テロとウェブというのが決定的に大きなことだったと思うんです。テロの問題はもちろん前からあったから、その意味ではあのテロについても言うべきことはない、となるかもしれないけれど、しかし、非常に大きなショックを受けたし、テロとの戦争という単純な善悪二元論がかなり大々的に演じられたというのは、〇〇年代の一つの特徴だった。もう一つは、インターネットが登場して、大きな物語から小さな物語へとか、観念的にいわれていた話が一気に可視化されたということはある。やっぱり9・11前後あるいはウェブ2・0前後というのは、なかったことにできない出来事だと思っています。そういう意味では3・11というのも、特に日本にいる以上は、当たり前前だけど非常に大きなことです。

もう一つ、饒舌と沈黙ということであると、秋

葉原事件のときにも、たまたま頭がおかしいやつがやっただけで、それを一般化して現代の問題として論じること自体おかしいみたい意見がありました。つまり例外として淡々とスルーしろと。しかしそういったところで現実が起こった事件と、そこで被害が起きて、社会があるショックを受けていること自体は何も変わらないわけであって、たとえば震災が起ってこれは哲学的に何もいうことがないというのは、むしろ哲学の無能を証明しているようなものです。

大澤 そのとおりです。

平野 そういう意味では、時代を画するような大きな出来事が起こったときの反応として、黙ってスルーするのと、やたらと語ろうとして空回りしてしまう、というのは、どちらもうまくアクセスしかねている反応ではないかと思うんですね。今回の出来事は、西日本の人間と東日本の人間との間でかなりの温度差があると思います。九州や京都の知人には、東北の人と会ったことがない人もたくさんいる。東北人がどういうメンタリティなのか、実感としてわからない人が多い

じゃないか。それが今回の震災を通じて、ある意味では強引に東北と直面させられた。もう一方では、被災したか、してないかというところに決定的な断絶があって、どこかで被災者のコミュニケーションが持っている排他性みたいなものを、こっちが勝手に予感してアクセスできない。そこで何かいいたいけれどもいえないし、空回りした話になってしまふというのは、ぼく自身の実感としても確かにありました。

不謹慎な仮定かもしれないけど、西日本があつて関東があつて、津波があつて原発があるというグラデーションだったら、ちょっと感覚が違ったような気がするんですね。間に原発が挟まっているために、津波の現場とも距離的な問題とは別な遠さがある。

大澤 そうですね。空間的な配置だけではなく時間的な継起の関係としても、津波があつて原発事故があるという連なりが、問題を難しくしている。おそらく津波だけだったら、それほど複雑ではなかった。津波はたいへんな災害ですが、そこからどうやって希望を紡ぎ出すかという問いに対

して、比較的答えを見出しやすかったでしょう。ところが、続いて、未曾有ともいってよいような原発事故が起きてしまった。そのとき、なおどうやって希望を見出せばよいのか。どのように考えれば、この出来事の中に希望につながりうる何かポジティブなサインを発見することができるのか、そういうことがわからなくなってしまう。

リスク社会としての現代の災害

平野 自然災害によって社会的な問題が浮かび上がってくるという側面はあって、東北の津波だけだったとしても、国とか県とか学界とかが考えていた防災の設備というのは果たしてどれだけ効果的だったのかとか、そういう社会問題は浮かび上がってきたと思いますが、やはり原発事故が起こったせいで、テクノロジーの社会性の問題とか、エネルギー問題とか、東電という会社の体質自体の問題とか、一気に問題が広がってあふれ返ってきたし、また、国際社会も単純に日本を被害者としてみるまなごしから、部分的には加害者

へのまなごしへと変わってきて、それを日本国民もものすごく敏感に感じ取っているところがあ

る。

ただ一方で、結局二一世紀、あるいは二〇世紀の頭から、自然災害が起こるということは、つまりそういうことなんだという側面がどうしてもあると思うんです。今後、未来永劫、自然災害が起こったときには、原発に象徴されるような問題が必ず出てくる、きれいにそっだけ除いて震災が起こることというのはあり得ないわけです。だから、今回、確かに津波と原発事故は分けて考えなければいけないけれど、同時にセットでも考えなければいけない。

大澤 まったく賛成ですね。「リスク社会論」という現代社会論があって、リスク社会としての現代社会の特徴は、純粋な自然災害もなければ、純粋な人為的災害もないということです。選択が自分自身へと反射してくる状態を「再帰性 reflexivity」という概念で説明するのですが、再帰性のレベルが上がってくると、ただ与えられたものとしての自然というものがもはや存在しなく

なってしまうからです。どんな災害でも、人間と無関係な偶発事であったり、人間にはどうしようもない神様の怒りの表現だったりほしくない。ですから、現代においては、自然災害と人為災害をきっちりと区別することはできない。

この点を押さえたうえで、それでも、リスク社会の困難が今回、特にはつきりと出てきたとすれば、それはやはり原発事故のせいですよね。現代社会では犠牲者・被害者であることが、逆説的に、絶対的な優位に反転するメカニズムをもってきます。誰も被害者・犠牲者を批判したり、告発したりはできない。だから、犠牲者・被害者であることが、その人を優位な立場におくという反転が生ずる。このため、ときに、「我こそは真の犠牲者・被害者だ」ということを争いあうような傾向さえ出現します。

こういう現代社会の支配的な傾向性をコンテクストにして、3・11をとらえたとき、津波の場合であれば、命を失ったり、財産を失ったりした東日本の太平洋岸のすべての人々が、自分たちのことを犠牲者であるといつて、誰もそれに異を唱え

る人はいない。彼らはほとんど純粋な被害者として、変な話ですが、同情の対象にしやすい人々だった。その同情や共感によって形成された共同性に、ぼくらは希望を見ることができたのです。

しかし、原発事故の場合は違う。福島県浜通りに住んでいて移住を余儀なくされた人たちだけではなく、首都圏や、もっと遠く日本列島に住んでいる人、さらには、放射性物質が海や空気を通じて流れていく周辺諸国の人たちも含めて、すべて被害者であることはまちがいない。しかし、少なくとも日本社会が、消極的にせよ、積極的にせよ、原発というものを選んできたとすれば、たいへんな害を受けているほとんどの人が、純粋な被害者、ただ犠牲を強いられているだけの被害者とはいえない。東京電力に第一義的な責任があることは間違いないとして、しかし、加害ということをも最も広くとった場合に、誰も、完全にイノセントな被害者にはなれない、というところに原発事故の難しさがあります。共感や同情のネットワークが拡がりにくいのも、この点に起因している。誰に、どのような立場で共感すればよいかわから

ないのです。

平野 被害者、加害者が見えにくいということでしょう、今後も原発を続けていくかどうかという問題で、原発が今度同じような事故を起こせば、立地する自治体は間違いなく被害者だけれども、一方で多額の交付金とかをもらっていて、その上でこの状況になっても原発を止めないというのだから、やっぱり加害者的な見方をされると思っただけですね。原発というのにはある意味、基地問題と似ていて、経済的な依存性が強いから、言い方は悪いけど麻薬みたいなところがある。一回始めてしまうと、なかなか抜け出せないという意味で。問題が生じて、止めるとなると本当に大変です。それに、押しつけられたという側面もあります。

時間スケールと「偽ソフィ어의選択」

平野 もう一つ、別の次元の話ですけど、時間の問題がものすごく複雑になったという印象を持っています。津波の被害だけのところは復興に向けて動いてますし、新しい時間がある意味で始まって

いる感じがしますけど、原発の周辺地域は時間が止まったままです。今でも圧力容器の穴があいたままで、落っこちた燃料は放置されているという、そのコアとなっている部分の「震災の時間」が止まらないからです。

今はそもそも、時間のレイヤーが非常に多層的になっていて、一番小さいところでは分子のタンパク質の合成とか遺伝子の複製とかの話から、一番大きなところは宇宙の話まである。今回みたいな自然災害は千年規模のタイムスケールだし、さらに原発でいうと何十万年後の核廃棄物の問題となる。だけど一般の人間が普通に暮らしている生活世界は、「来年のことを言うと鬼が笑う」というくらいのタイムスケールなんですよね。

人間が、遺伝子工学とかのものすごく細かな単位の話から——遺伝子は逆にものすごく長い話にもなりますけど——、日常の時間から、福島で止まってしまった時間から、自然災害の千年単位、あるいは廃棄物の十万年単位、というタイムスケールの中を、どのレイヤーも生きながら、自分の声を反映させていくというのは、そもそも可能な

のか。そういうことを一般の人が知悉して、政治的に何か声を発するなんていうことが本当に可能なのか、不可能とはいわないけど、限りなく困難だと思っんです。その時間の問題の混乱というのが、かなり大きいのではないか。

大澤 いまのは、おそらく今回の問題の一番核の部分に関わる問題提起だと思います。

破局があるかといいたいそこから新しい時間が始まるんですね。これが希望ということですよ。破局は悲惨なだけども、破局のおかげで新しい時間が始まる。その「新しい時間が始まる」という意識や気分の中に、希望が宿る。しかし、原発事故は破局なのですが、新しい時間を開始しない。まだ破局の最中なんですよね。その「最中」からいつ抜けるかもわからない、抜けることのないトンネルみたいなものに入ってしまった。

最大の原因は、いま平野さんが指摘した時間スケールの問題にある。ぼくが今回一番驚いたことは、これほどの事故が起きたにもかかわらず、原発反対派、つまり原発を減らそうとか、なくそうという方向の世論が意外なほどに小さいというこ

とです。事故後一カ月くらい経過した時点から、現在の半年以上が過ぎた時期までの間に、何度か、新聞等による世論調査が行われてきた。それによると、「脱原発」「反原発」に賛成する人の数は、意外なほどに少ない。事故後一カ月の時点では、原発を維持し推進する方に賛成する人が、まだ過半数なのです。とりわけ特徴的なのは、原発事故の被害が最大になるはずの、原発の立地自治体が、むしろ他の地域の人々よりも原発支持だということですよ。

事故後に原発支持派がなお多いというのは、特に日本で顕著です。ドイツが原発を全廃することに決めたのは大きく報道されましたが、それだけではない。フランスは簡単には脱原発できないと思うけれども、そういうところでも、少なくとも世論の水準では反原発・脱原発が圧倒している。

平野 そうです。

大澤 だから、ヨーロッパから見ると、日本は異常なほどに原発支持率が高いことになる。表面的な原因は、一応は説明できます。原発には、直接的な利益や間接的な利益があるからです。直接的